

先進ドイツに羽ばたく国費留学生

没後100年・陸軍軍医鷗外の青春日記

藤川琢馬（会員）

森鷗外（森林太郎）（1862～1922）は明治17（1884）年から4年間、陸軍軍医としてドイツに留学し、「在独記」という漢文体の日記を書いた。これを仮名混じり文に改め、初恋の女性に関わる部分を削除し、明治21年『独逸日記』として発表した。

世界の先端にあって何ら臆することなく行動する林太郎の活気あふれる留学記を目にすると、目下3年間ものコロナ禍により強いられた社会的な鬱屈、不安定な内外の政治情勢、あるいは長期にわたる日本経済の停滞などから、総じて覇気に乏しい現社会とわたくし

たちに新鮮な刺激を与えてくれる。それは林太郎個人としての優れた人物によることはもちろんだが、明治新政府の、さらに遡れば幕末、徳川幕府から続く欧米への度重なる使節団・留学生の派遣と彼らの進取の気概、同時に人材を育成しあらゆる先進文明を取り入れようとする、確固たる国家の意志を見ることができるからであろう。林太郎の日記には、将来を背負って立つ国費留学生の使命感が感じ取れる。留学記を通じて、およそ130年前のドイツの日常の一端に触れることができるのも、わたくし的には興味がある。

本年は鷗外没後100年に当たる。留学記を理解する便宜のため、本稿では荻原雄一現代語訳『鷗外・ドイツ青春日記』（2019）を利用した。

1. ドイツ留学に至る経緯、留学先と職務

明治5（1872）年、林太郎10歳のとき父と上京し、官立医学校入学に備えてドイツ語習得のため私塾に入学。明治6年12歳で第一大学区医学学校（現東京大学医学部）に2歳多く偽って入学し、ドイツ人教官に習う。

明治14年19歳で本科卒業、同年陸軍軍医副（中尉相当）となり陸軍病院勤務。

明治17年22歳、衛生制度の調査・衛生学の習得を目的にドイツ留学を拝命し、8月24日出発、10月7日マルセイユ着、陸路にて10月11日ベルリン着。船中の記録は『航西日記』として発表。明治17年11月から11か月間ライプツヒで、5か月間ドレスデンで、さらに



ベルガモン博物館

13か月間ミュンヘンで、大学研究室において勉学に勉め、ドレスデンでは軍医学講習会に参加。

その後の明治20年4月中旬から21年7月初旬までの14か月間強、ベルリンでコッホ教授の衛生研究所において細菌学を学んだ。

留学の合間に国際会議出席の職務を担った。すなわち明治20年9月下旬カールスルーエでの赤十字国際会議に日本代表の通訳として随行、同年9月末から11日間ウィーンでの万国衛生会に日本代表として出席。

明治21年7月5日帰国の途へ。ロンドン、パリなどに立ち寄った後、7月25日マルセイユ発、9月8日横浜着。

2. ドイツ留学全体としての考察

察

・留学当初から多数の伝手^{つて}、友人、知人たちと交流した。「ドイツ留学記」はさながら交遊録といってもいいくらいで、誰とどこで何をしたという記述が多い。留学の13か月強を経た明治19

年1月3日の記述には石黒忠恵^{ただのり}軍医監からの手紙で、君は衛生学の一科を専修しなさい、と言われ、これは誰かが森は社交ばかりしていると密告したのであると記している。

・ドイツで交流した人たちには、留学や移動でまず挨拶や手続きをしなければならぬ在独の陸軍上層部、公使、官僚、伯爵などがいた。また陸軍軍医関係だけでなく、分野の異なる先輩、後輩、友人などの留学生仲間や同じ船で来た留学生もいた。橋本綱常軍医総監の助言に従って決めた留学先大学・研究室の教授や同僚、下宿先や食事の世話になった家のドイツ人家族、そこで得た外国人の知人たち、また演習先（ザクセン軍団）のドイツ陸軍、軍医関係者などがいて、幅が広い。

・それは留学当初からドイツ語のハンディキャップがなかったことにもよる。語学が未熟だった場合は、語学向上のため同国人を遠ざけることはよくあるが、森にはその理由がないので日本人とも頻繁に交流した。出かけるにしても多くの場合、誰かと一緒であった。

・またそれは、潤沢な留学資金にもよろう。ライプツィヒ到着翌日（明治17年10月23日）の記述には、下宿は朝食（パンとコーヒー）付き40マルク、昼・夕食はある老婦人宅で取り50マルク、暖房費や洗濯料金など含め生活費は100マルク必要だが、給与は年に3000〜4000マルク、家への仕送りはあるが全く十分。ドイツでけちけち暮らす理由がどこにある？という。明治〜平成値段史（WEB）によると、明治18年の為替は1マルク＝28銭、すなわち給与は年840〜1120円（月70〜93円）に相当し、生活費は月28円程度で済み、独身の林太郎にとって全く潤沢である。なお明治18年の給与所得者の年収は178円（WEB）で、当時の1円は現在1万円に相当する。

・訳書の「あとがきに代えて」において訳者は、鷗外のドイツ留学は能力・才能をめいっぱい発揮して青春を満喫していたと記述し、鷗外の留学から16年後の明治33年に、文部省から年額1800円でロンドンに留学した夏目漱

石と比較している。都市部消費者物価指数は明治17年から明治33年までおよそ1・5倍上昇した（WEB）ので、33年の1800円は17年であれば1200円に相当し、漱石の留学資金も数値上は潤沢である。しかしこの額では名門校ケンブリッジ大学に行くには資金が足りず、切り詰めた生活だった。イギリスは私学、ドイツは公立なので学費は相当異なり、二人のふところ事情の違いは十分理解できる。

・ドイツ留学記が交遊録といえるなら、日記の記述がなかった日は特段に記述する内容がなかった日、すなわち日常生活のごくふつうの日である。それは個人的な買い物、家事、雑事、自室での勉強や調査、論文執筆、あるいは研究室での実験、大学での受講などである。以下に示すように、留学期間の初年と最終年の日記記述日数は、それぞれの全日数の27および22%であったのに対し、留学生活の常態である間の3年間は45〜51%である。大雑把に言えば2日のうちの1日は誰かと交流があったと考えられる。

明治17年10月12日〜12月31日		
明治18年	167日	22%
明治19年	170日	27%
明治20年	188日	45%
明治21年1月1日〜5月14日	30日	46%
		51%
		22%

・林太郎は細菌学や衛生学・栄養学など先進知識の習得に励み、同時に陸軍軍医としてドイツ軍団の演習に参加し軍関係や先進技術の見学も積極的に行っていた。日常、軍医・日本人としての矜持を保っていた。

3. 留学記の内容

3・1 衛生学・栄養学の研究

留学の当初はライプツィヒで日本茶の分析から始まり栄養学を修め、細菌学を受講、ミュンヘンではビールの利尿作用の研究、一番長く滞在したベルリンでは細菌学の月例会開始など勉学に励んだ。コッホ教授のもとで水道源・下水道・消毒所など各所を見学するとともに、下水・と殺場汚水を採用して

衛生実験を行い、公衆衛生の研究とともに実務にも取り組んだ。これらの研究には、しばしば流行したコレラの防疫が背景にあろう。

3・2 軍医としての研修

ドレスデン在留時には負傷者運搬演習の見学、ドイツ第12軍団（ザクセン軍団）の秋季演習参加、軍陣衛生学受講、兵器庫・戎衣庫・兵車庫・武器庫・澣衣廠（軍服の洗濯場）の見学、刑務所見学とくに衛生関係を観察、フリードリヒ病院の衛生面の見学、ベルリンでは軍需品貯蔵所見学、ドイツの軍医部予算の講義、カールスルーエ担架兵団の演習見学、陸軍病院・歩兵舎・砲

兵舎見学、陸軍病院内の化学実験場および蠟型陳列場見学のほか、ドイツ軍医による授業、近衛兵の兵舎見学、囚獄の見学など軍医としての研修に励んだ。

3・3 執筆・講演・学会ならびに団体関係の活動など

論文執筆、学会・講演会への参加、ドイツ人の団体・日本人会などへの参加の記述も多い。ライプツィヒ在留時の最後に「日本兵食論」の大意を書き上げた。これは明治7〜9年東京医学校の教師をしていたドイツ人医師ウェルニヒによる、日本人の虚弱骨格は古来からの粗食な日本食によるものとした

た日本食批判に対する反論で、西洋食を日本兵食に取り入れようとする日本の学者に対しての批判的意見を述べ陸軍の立場を擁護したもののだが、国民の一般食においては、西洋食論者と同じ意見であるとした（後記）。

ミュンヘンでは「日本家屋論第二稿」をほぼ整えた。強健な兵を作るために衛生性のよい家屋にし

なければならぬという論である。また「駁正ナウマン論」に着手した。日本に対する誤解への反論である（後記）。そのほかドレスデン衛戍病院における衛生将校会での講演、地学協会で「日本家屋論」の講演、「日本住家の民俗学的衛生学的研究」などの出版手続き、ベルリンの在独日本人の集まり「大和会」でのドイツ語講演、コッホ研究室での論文「水道中の病原菌について」が『衛生学雑誌』に収載、など。

またドレスデン在留時の最後にドイツ人軍医監の求めに応じ週5時間日本語を教授し、ベルリンでは週2回クラウゼヴィッツの難解な兵書「戦争論」を講じた。クラウゼヴィッツはプロイセンの將軍・陸軍大学校長で、同書は戦争とは何かという分析的・理論的な戦争哲学の書である。森は後に訳書を出した（明治34年）。

また『ドイツ医事週報』編集長を訪ねた。これは最近横浜十全病院のアメリカ人医療宣教師シモンズが、日本におけるコレラ予防の実態や脚気発病の原因などを取り違えて発表したのに対



軍服正装の森田太郎

し、訂正し反論を加えたいと依頼に行ったものである。コレラは明治新政府となった後も2〜3年間隔で数万人単位の患者を出して流行した。明治12年と19年には死者が10万人の万台を超え、日本各地に避病院の設置が進んだきりかけとなった。

3・4 先進技術・知識の見聞

自身の研究や軍医としての研修以外に、先進技術に触れ、工場設備などを見学して見聞を広めた。ドレスデン在留時、電気灯の機関を見学した。ミュンヘンでも電気灯と換気装置の見学を行っている。電灯は1879年エジソンが白熱電灯を実用化し、81年ニューヨークで電灯事業が開始されたのが始まりで、日本では85年白熱電灯が灯され、86（明治19）年東京電燈会社が開業したのである。森の留学前の日本では電灯を経験していない。またガス製造所、中央給水所、ゲーエ工場（蒸気機関で丸薬を製造する大工場）を見学し、国立工業大学において講演「電気灯の現況」を聴いた。人工酪製造所を見学し、製品は北ドイツとイギリスに

輸送して肉体労働者の食卓にあがると聞く。これは牛脂、牛乳、油および塩を原料としてマーガリンを造るもので、副産物として頭髮や髯に塗る香脂を造る。フランスでは1869年ナポレオン三世が軍用・民生用に安価なバター代替品を懸賞募集し、後にマーガリンが造られる発端となっている。酪農国のドイツやフランスにおいても、当時はバターは高価であったことがわかる。

3・5 語学、読書など

得意なドイツ語を駆使し、国際会議の書類を作成し通訳を務めた。また折に触れて漢詩を作り、中文はお手の物と称している。ライプツィヒで大学が夏休みに入ったとき洋書をひもといた。ギリシャ文学、フランスの小説、ダンテの神曲、ゲーテ全集などである。ライプツィヒでは師について英語を1年間学んでいたことが記され、ドレスデンではドイツ人軍医についてスペイン語を習うことにしたと記述する。ベルリン滞在時には毎日曜日フランス語を習う約束を交わしたとある。ほかに、ミュンヘンでは速記法の研究をし始めた。

3・6 コンサート、観劇、見物ほか
各所でコンサート、オペラ、サーカス、観劇などを重ねた。それらの中でイギリス人が演じる日本劇、サリヴァン作曲の喜歌劇「ミカド」を観たことが記述されている。訪欧した年ロンドンで「日本展」が開催され、ロンドン中で日本への興味を沸かせた。この時期に「ミカド」が製作され672回の記録的な興行となったが、天皇にとっ



オクトーバーフェストでの巨大なピアホール（1978年9月）

て侮辱的という理由で上演中止となった。また、ドイツ人により1877年以来発掘が続いていたペルガモン（現トルコ・ベルガマ、前3世紀頃の古代都市遺跡でヘレニズム文化の中心地）を見学した。発掘されたゼウス祭壇はベルリン・ペルガモン博物館に復元されている。これらはすべて、ドイツ人や日本人の友人知人と行動をとともにしている。

3・7 医学や近代化に関わる記述

明治18年4月父からの手紙で、流行りの痘瘡が減少し始めたことを聞く。脚気の原因の論争があり、日本海軍ではイギリス海軍の経験に倣って麦飯を食わせ、疾病は脚気菌が原因ではないと考えるが、陸軍では白米を食わせるという宣伝文句で農家の次男三男を集めているので、米食中心を譲れない。森は学問的根拠を求められているが、陸軍を背負っているため海軍に同調するわけにいかない。明治19年7月品川彌二郎公使と食事中、麦飯は本当に体にいいのかと問われ、舌が旨いと感じる食べ物が身体にいいと答えたと記す。

ライプツィヒでアメリカ人の友人と飲んだ際、この友人の家系は肺結核なので結婚を避けていると聞き、森は、最近コッホ先生が結核菌を発見したことを学会発表したので、肺結核が遺伝するというのは過去の妄想だと論じた。「羅馬^{ローマ}学会」の友人からの手紙が届いた。この会は日本語の表記をローマ字にしようと主張している。森はヘボン式の綴りで返書を出したところ、羅馬字会のやり方と一致していて、君はすでに羅馬字を用いている、天才だねと驚かれた。地学協会に行き、親しくしているロート軍医監による「マラリア地方論」の発表を聴いた。

ドレスデン在留時地学協会で、日本に長期滞在し旭日章を授章したナウマンの「日本」という講演を聴いた。日本の近代化について誤った見方をしていることに對し、日本人の矜持として耐えられなく反駁し、会場から喝采された。欧州の日本事情論は偽りが多いと記述する。ハインリヒ・ナウマンは明治8、18年東京帝国大学に招聘され日本における地質学の基礎を築いた。

貝塚も2、3発見し、ハインリヒ・フォン・シーボルト（フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの次男）の貝塚調査を助けた。また日本で1万5千年くらい前まで生息していた象の横須賀で発見された標本について研究し、ナウマンゾウと呼ばれるようになったことで知られる。

3・8 ドイツにおける慣習や日常に関わる記述

明治17年10月ベルリンに到着し、橋本軍医総監に連れられて青木周蔵公使に挨拶した際、公使から学問というのは机上に置いた本の文字を追うだけを目指すのではなく、西洋人の考え方、生活ぶりとか礼儀とか、こういった風俗や習慣をじっくり見極めれば、それでもう洋行の手柄は十分だと諭された。

ライプツィヒで初めての下宿先を訪ねた折、羽毛の掛布団の軟らかさ、軽さ、暖かさに触れ、ソファという長椅子のちよつと休める便利さを知った。ライプツィヒの街は煤煙が空を蔽い、家々の白亜の壁は塗り替えても、何日も経ないうちにまた黒ずんでしまう。

教会の鐘の音がひねもす耳にうるさい。レストランと煙草屋のほかは日本と違ってよく休む、とドイツに対する新鮮な印象を記述する。1月に男も女もスケート靴を履いて、手をつなぎながら滑りまくるスケート（踏氷）という遊びを初めて見た。下駄や草履・草鞋は、履物を脱ぐ習慣の日本の住環境では便利だが、スケートとは無縁である。ドイツ語には「懐かしい」を意味する言葉がない。言葉がないのは、その感情がないからだと観察する。

ドイツ人のビールを飲む量に驚く。半リットル入るドイツのビールジョッキで25杯も飲み干す者が稀だとはいえないという（日本では明治23年ビール大瓶が18銭と高かったので大量に飲むことはあり得なかった）。遊歩道の並木路にあるベンチは若い男女に占められ、むやみに身体をくっつけ合って唇を重ねているのに誰も気にしない。デューテという紙袋で売るサクランボを貴婦人といえども食べ歩きする、など日本では考えられない光景に目を奪われる。

十字架会に加入しないかという誘いに乗った。会には規則があり、生涯の失策3つを挙げなければならない。ただしすでに婚約者がいたり既婚者はあと2つを挙げればいい。集めた会費は貧民を救助する資金に充てられるらしく、この会は国中にあると聞く。

友人と「ボウレ酒」を飲んだ。

真冬になるとこの酒を温めて、「グリューワイン」と称して飲む。12月24日、以前ライプツィヒで下宿していた家のクリスマスに行き、プレゼントを交換した、ドレスデンで友人たちとグリューワインの盃を挙げ、元旦の零時ぴったりにProsit Neujahr.（新年おめでとう）と叫んだ。1月20日ドイツ人の友人宅で誕生日会を開いてくれ（森の誕生日は19日）、二十数名集まった。テーブルには贈り物が並んでいた。

明治19年3月8日ミュンヘン着。街なかには奇怪な服装をした男女が行き交い、1月7日から3月9日の灰の水曜日まで謝肉祭（カーニ

バル）で、日本の盆踊りの賑わいを思わせた。断食と苦行の期間に入る前に「肉よ、さらば」と飲み食いし、どんな騒ぎをする風習は昔から変わらない。マックス・ヨーゼフ一世の旧居城に行くのに、蒸気機関で街なかを走る軌道車に乗った。この年の6月バイ



カーニバルでの雑踏（2018年3月）

エルンのルートヴィヒ二世が湖で溺死し、侍医グッデンも溺死した事件を耳にした。ワーグナーを庇護し、ノイシュヴァンシュタイン城ほか豪華な宮殿建設を行って浪費に溺れた王である。学生の決闘がある、見に行かないかと誘われた。ドイツの学生の多くは中世の騎士道の名残というべき慣習を持っている。主張し合い争論の末に、結論を果し合いに委ねる。終わると握手して和を講じる(『独逸日記』原文には詳細に情景ややり方が記述されている)。十月祭(オクトーバーフェスト)では競馬、自転車競走ほか見世物小屋(人魚、河童など)が立つ。馬鹿馬鹿しい、と記す。

ドレスデン在留時サクセン軍の演習に参加していたある日、ステレオスコップを初めて見た。2枚のレンズで写真を立体的に見せる装置である。ミュンヘンで菜食主義者の料理店で昼食を取った。当地には著名な栄養学者フォイトがいるのに、こんな妄想を信条とする人たちがいるのはまことに不思議だと記述する。菜食主義は19、20世紀に世

界に広まり、1908年に国際ベジタリアン協会が設立された。西欧の多くの国で現在(2010年)総人口の10%前後いる。イタリアで亡くなった友人に遺児がいることを聞く。日本人が欧州に来て子を産ませた例は少ないが、留学生ごときが財力すらなくて、他国に醜を遺してはいけない、という。ベルリンで友人とティーアガルテンにある「獣苑」に入り、東に位置する凱旋塔に登った。街を俯瞰すると、四方の人家の煙突からは煙がもうもうと噴き出していた。

家書が届き、弟篤次郎が菊五郎や伊勢三郎の声色をまねして拍手喝采された、などと記されていた。当時声色は人々の楽しみであったことがわかる。11月3日天長節の宴が公使館で開かれ、シーボルトほかと出会った(森が会ったのはフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの長男アレクサンダーであろう)、乃木とも会った(乃木希典は明治20年1月〜6月政府の命でベルリンに留学していて、森との交流があった)。

ドイツの歴史や伝統、宗教に基づくこれらの慣習の多くは現在も変わっていない。都市環境は現在大きく改善されたが、ライプツィヒやベルリンのみならず、煤煙や大気汚染は石炭をエネルギー源とした当時避けることのできないものだった。十字架会の会則やカーニバルなど、遊び・ふざけ・冗談が半ば公的な位置づけにあるものにもまかり通っていて、まじめな日本人にとってはそれらに付き合うのは疲れるに違いない。十字架会やドイツ婦人会などが行っている社会福祉活動は、日本人にとっては目立つ存在であつたろう。

わたしはある知人から、知人のご祖父が明治の半ば、監獄制度の調査研究を目的に司法省の国費留学生としてドイツに派遣された折の、家族に宛てた書簡集を目にする機会をいただいた。林太郎の留学時と重なり、互いに交遊があつたかもしれない。書簡集においてドイツと日本の世相や日常に触れることができ、本稿を記す出発となったことを付記する。